



「日本一」の忘れ物を取りに行きたい
花巻東高校硬式野球部監督
佐々木 洋さん

ギーをいただきましたし、さらに頑張りたいたい」と感謝していました。

選手たちへは「雪というハンデイがあり調整は難しかったが、練習に良く耐え、乗り越えてきた。エラーも少なく、自信を付けたと思う。よく頑張った」とねぎらいの言葉。

佐々木監督は、江釣子生まれの33歳。現在も上江釣子に自宅を構えます。小学生のころから地区のスポーツ少年団、中学校と軟式野球に触れ、黒沢尻北高校では硬式野球部でキャッチャーとして活躍。「北上で野球を知り、育ってきた」と自らの野球の原点を話します。

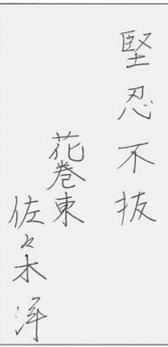
国士館大学へ進学してからも野球の道を歩み、指導者を目指すことを決意したといいます。卒業後は横浜隼人高校（横浜市）でコーチを経験。平成12年に花巻東高校の教諭として赴任後、バドミントン部の顧問、ソフトボール部の監督を歴任し、14年秋から硬式野球部の監督に就任しました。監督となつて3度目の甲子園出場（春1回、夏2回）。社会科の教諭で生徒指導も務める佐々木監督は「野球選手を育てるのではなく、野球もできる立派な人間に育てること」を信念に指導を心掛けています。

出場してみても「改めて岩手のレベルの高さを感じた。強豪が多く県代表の切符を勝ち取ることは容易ではないが、日本一の忘れ物を取りに出場したい」と決意を新たにしています。

佐々木監督は、北上の球児に「指導者のいうことを聞き、目標をしっかりと立てて行動することで実現に近づくと」とエールを送ってくれました。

第81回選抜高校野球大会で「日本一の旗を持つてこられなかったことに、悔しさが残った」。開口一番、佐々木監督は悔しさをにじませます。岩手県で春夏合せて初となる準優勝の快挙にも「高すぎると言われながらも日本一を目標に練習をしてきた。選手たちも公言していた。だからこそ悔しい」と。

地元に戻ってきたときの大歓迎に「皆さんに元氣と勇氣をもらったと言われましたが、逆にわたしたちの方がエネルギー



佐々木監督から書いていただいたメッセージ「堅忍不拔けんふばつ」意志が固く、じっと堪え忍んで、心を動かさないことを意味する

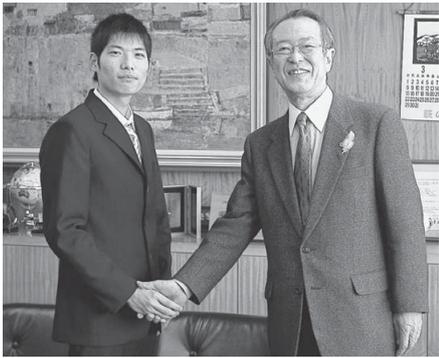


国際交流ルーム発

ハロー！ まいぶんんど 114

いらっしゃい！ 三門峡市から第7期の研修生

李さんは4月6日、伊藤市長へあいさつのために来庁し、研修への抱負を話しました



満々です。河南省焦作市(三門峡市から東に300キロほど離れた

北上の友好都市、中国・三門峡市から今月来りびんばかりの李斌さんは、早速、当交流ルームのボランティアに登録をし、いろいろな活動に挑戦したいと意欲

町)生まれの20歳で、家族は両親と姉。三門峡職業技術学院で日本語を専攻しました。北上コンピュータ・アカデミーの第7期研修生として2年間勉強します。

今回初めて自炊を経験し、炒飯や煮魚を作ってみました。日本のことは、子どものころから「ドラえもん」などのアニメを通じて知っていましたが、想像以上にまちはきれいで、車が多いと驚いていました。「日本の女性は、おしゃれが上手ですね」との感想も。趣味は卓球と読書で、柔道も習ってみたいと抱負を語っていました。

国際交流ルーム
電話・ファクス：63-4497
電子メール：kiah@kitakami.ne.jp
おでんせプラザぐろーぷ3階 生涯学習センター内
開館日：毎週月-土曜日 午後1時-7時
休館日：日曜・祝日、第3水曜日、年末年始



中央図書館 ☎ 63-3359

江釣子図書館 ☎ 77-2215

和賀図書館 ☎ 72-2322

きたかみ物産館

南部藩船の艦(ひらた)
ひらた船



(株)太田菓子舗

本通り1-5-35
☎64-4337



専務 太田 静子 さん

ひらた船は江戸時代、北上川を航行した南部藩第一の商船として米俵350俵を積み黒沢尻川岸(現北上市)から石巻まで航行した大型商船です。艦船をかたちどり、和洋風に焼きあげた味は、きつとご満足いただけることと思います。詰め合わせも好評です。ので、お茶菓子としてどうぞ。当時の北上を思い浮かべてお召し上がりください。

《4月の新着本から》

『大きな約束』

椎名 誠 著
集英社

アメリカに住む息子・岳に子供が誕生した。「じいじ」になったシーナが孫・風太と交わした約束とは…。親子三代、シーナ家の物語

『脱メタボ!のおべんとう』

館野 鏡子 著
主婦の友社

家族の健康はなによりの宝物。愛情たっぷりのおべんとうで、カロリー・手間・お金をみ〜んな節約し、メタボを予防・撃退しましょう。



散歩道

107

北上市長 伊藤 彬

伊藤 彬 さん

同姓同名で字まで一緒のケースはどの程度あるものだろうか？わたしのようには彬という字を使う場合はまれであると思っていた。インターネットで調べてみると何人か登録されていた。もちろんお会いしたことはない人がほとんどであるがただ一人、相手の人も気になっていたのであろうか、誘致企業の社長さんから名刺が届けられた。初めてのことであり驚いたが、届けてくださった人もちゃめっ気たっぷりに笑顔で渡してくださいました。一度お会いしたいですねと伝言をお願いしましたが、まだ機会に恵まれていない。

サラリーマン時代「伊藤さん、絵を描くんですね」と聞かれた。「ピルの向かいの画廊の展示会見てきましたよ、すごいですね」と言われ驚いた。同姓同名の伊藤彬さんの個展が開催されていた。すばらしい日本画であると思い、絵画に詳しい知人に聞くと、芸大出の若手で将来が囑望されている人と判明した。あなたと同姓だものぜひ買いなさいと薦められたが、絵を買うお金もなかったし身分でもなかったが、気になって調べてみた。なんとサラリーマン二年目のわたしの給料の10倍近くもするという。絵に興味のある父にも聞いてみた。いい絵描いているとは言ったがお金貸すとは言ってくれなかったのであきらめた。脳裏から離れて約30年。芸大同期の画家から評価を聞き驚いた。今や大変評価の高い画家になっていて、高額で手に入らないとのこと。人気番組の「なんでも鑑定団」を好んで見て笑っているが、あの時買ってあげばと思ったりするのは「たられば」の世界か？ほしいときには金はなし。借金しても買うだけの度胸も目利きもなかったことなのだ。